

「ゆとり」雑感

林 俊 光

数年前の朝日新聞の天声人語に、ある外国人の言葉が引用してあったことがある。それは「やらなければならないことが山程ある時は、上から順に一つ十まで並べ挙げて、上の二つができれば仕事としては八割達成したのも同様である」という意味であったと記憶している。四月から奉職させていたで、よく

やく気分的にも一段落の感がある現在、先
の言葉を想う時、必ずしも妥当性があるとは
感じられないのが実感である。十の仕事の内
二終ったものは、やはり二割でしかなく、残
りの八はまぎれもなく八割なのである。気分
的にも、なかなかゆとりをもつまでにならな
い状況ゆえかもしれないが、とても八割も終
了したとは考えられないのである。しかし、
逆に考えると、二つの仕事を終えて残りが二
割と考えることができるような心のゆとりが
仕事の面でも日常生活の面でも必要である
ということであろう。むしろ、あの言葉はそれ

を示唆したものであったのかもしれない。

同じようなことは学生諸君についてもいえる。例えば授業の終り掛け、自分の学生時代のことを想うと余り偉そうにいった柄ではないが、話の雰囲気でもうすぐ終ると感じたらがたがたとテキストやノート或いは鉛筆などを片付けに掛けて、最後まで人の話を聞いていようとしない。自分の授業のまずさが彼らをそういうふうにするのかもしれないという気持ちがかくくしない訳でもないが、願わくはアト数分の間、人の話を聞く心のゆとりを持って欲しいと思うのである。

私が未だ学生だった頃、ある先生と私の同級生何人かと一諸にお酒を飲みに行ったことがあった。その席で先生は「自分は人の話を聞ける人間になりたいと思って努力している」旨の話をされた。当時の私は、クラブで討論をしても何とかして自分の意見を通そうと必死になってまぐし立てて、人が発表している途中でも横から自分の意見を割り込ませることなど珍しくなかった。そんな時、その先生が「人の話を聞くことのできる人間になりたい」と言われたことが妙に胸に引っ掛つたのである。それ以来、未だにその言葉が何かの拍子に浮んで来るのである。それは、自

分自身気付かぬ時に、まだまだ人の話を聞く姿勢ができていない表われたと自分自身に言い聞かせる機会にしているのである。人の話を最後まで聞くということは、その間に自分の考えをまとめる時間も生まれるのであり、ひいては心のゆとりをも生むのである。先生の言葉が多少なりとも自分のものになる迄には数年掛つたように思えるし、未だにダメな部分が多分に残っているようにも思っている。

以前、テレビで子どものしつけを取り上げているのを見たことがあるが、そこで、子どもに付いた習慣を直すのには、その習慣が身についたのと同じだけの期間が必要である、と話されていた。その説からいくと、私自身、本当に人の話が聴ける人間になれるには、未だしばらく年数が掛りそうであるが、一步一步漸進を重ねていきたいと思っている。

ゆとりもなく締切り間際になってから、あわただしくこんなゆとりの原稿を書く自分自身矛盾を感じつつペンを置きたい。

(はやし としみつ 社会学部助手)